

内田魯庵全集

補卷 2

随筆・評論 VI

ゆまに書房

内田魯庵全集補卷2

昭和六十二年七月二十五日 初版

著者 内田 魯 庵

編者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 文勇堂製本工業(株)

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一セントラル大手町

電話 (二九二〇)七九八

振替 東京四一六三一六〇

内田魯庵全集補卷2／隨筆・評論Ⅵ・目次

顰の舌

例 言	九
前口上	一一
御一新の舊弊退治	一三
今昔較	一六
明治初年の進歩思想と言論自由	一九
漢語全盛の文明開化	二二
佐田介石及びランプ亡國論	二六
ポスター宣傳	四五
納札の過去現在未來	四七
蒐集家	五八
郵便切手と翫具	六一
世界的蒐集	六五
野蠻人の藝術	六八

ネビンソン	七四
埋もれたる天才	八一
三百年前の日本人虐殺	八五
キシ―ネフの虐殺	八九
切支丹迫害	九三
リンチ	九九
猫	一〇三
獺の耳垢	一一三
バクダン	一八三
凡例	一八一
バクダン	一八三
醫者と藥	一八六
葬式	二〇一
クリスマス	二一九
惡魔拂ひ	二二二
學者文人の歳晚	二二六

目 次

正月改善	二三二
元 日	二三五
年頭葉書	二四六
骨 牌	二五〇
床の間廢止案	二五三
新 畫	二五八
賈 物	二六五
新聞の訪問記事	二九六
新聞記事の Topsy-turvy	三〇七
英國衰亡論	三一一
虱	三一七
兵役拒絶の宗教	三三四
危險思想の發生地	三六四
革命と文人	三七〇
素人寫眞	三七五
早取寫眞	三八二

撮影難	三三八
廣告	三九三
手紙	四二〇
青鞨	四三八
火事	四五〇
家	四五六
建築的キユーリオ	四六五
化物屋敷	四七四
怪談	四八八
百物語	四九七
解題	五〇三
解説	五六九

隨筆・評論 VI

獺の舌

例言

一『猿の舌』は昨年の夏の議會が初まる前一ヶ月間、讀賣新聞へ連載したものである。毎日の讀物だから毎日の興味を主とし、自然時事問題にも觸れ、折々は飛んでもないソツポへ脱線した事もある。過去の事跡を書いても追憶にもならず考證にもならず、猶更時事問題の感想とは云はれないものだ。獅子の聲なら群獸を懾伏させる。鳥の囀りなら佳人を嬌然びつこうさせる。だが、猿の舌では『呀おや、ドツカで寢惚けた聲が聞えるぜ』といふ位なもの。

一隨つて單行本とする場合は時事に觸れる無用の個處を削り取るツモリであつた。が、矢張其儘にして置く方が時代を知る後のよすがにならうといふ友人の説もあつたし、且無用の個處を削り取るだけでは、ドウセ出來損なつた人形でも、顔の出來がマズイからツて首をモギ取つて了うやうなもので、所謂角を矯めて牛を殺すになる。生中なまなかのセツチをするよりはと、眼を瞑つぶつて其儘にして置く。

一尤も新聞の限りある面積に餘義なくされて書殘した個處や、人に注意され或は自分になつて氣が付いた二三の思ひ違ひや、其他生硬不熟な字句の修正に若干改削を施した處はある。が、書き足すよりは殆んど全部の書直しを要するものは總て他日に譲る事にした。例へば佐田介石の如きは餘り長くなり過ぎたから書き剩したし、切支丹迫害の如きは裕に一篇をなすに足るだけの資料があるから、三十行や四十行延ばしたつて書盡せるものでは無い。維新當時の零碎の記事の如きも亦腹案中の近代文化史の一

斷片である。

一新聞連載中、各方面から種々の御示教やらお叱言^{こじご}やらを頂戴した。其の一つ二つを云ふと『郵便切手と翫具』の項中、切手の蒐集を知識的だと云つたに反して、土俗翫具は趣味的で何等の知識をも與へないとウツカリ筆を滑らしたのが土俗翫具を一段貶したらしく請取られたと見えて、長崎の『土の鈴』といふ土俗研究の雑誌から手厳しく叱られた。又『野蠻人の藝術』中ツイ脱線して山本鼎君の繩張の農民藝術に踏ん込んだので山本君から有益なお叱りを頂戴した。山本君には取敢へずお返事を差上げて置いたが、『土の鈴』には爰でお禮を申上げて置く。

一『獺の耳垢^{みみあか}』は以前或る雑誌に連載したものを基礎として殆んど全部に渡つて刪潤を施こし、更に若干を書添え或は全く新たに補足したものもあるから曾て發表したものとは全然相違してをる。且此舊稿は世間から餘り注意されない雑誌に、シカモ匿名で發表したのだから、一部少數の人にしか讀まれなかつた。恐らく今では記憶してゐるものはあるまい。正直に舊稿とお斷りするものゝ萬更ソツプの出し殻のやうなものでは無いと、内々で己惚れて置く。道家の秘法に由ると、龍の涎^{よだれ}や鳳凰の糞が仙家^{せんか}の金丹の原料となる。獺の耳垢も亦忘憂長生の秘藥となるかも知らん。人蔘や何首烏や珍奇な漢藥が流行して木乃伊までも賣藥とならうとする世の中、長生きしたい人に獺の耳垢をお勧めする。

千九百二十一年五月

魯庵生

獼の舌

(一) 前口上

愚劣な總選舉が濟んだ。お味方黨の藁人形が註文通りにゾロリと出揃った。今度こそ野黨が眞劍に大發憤する處だが、ソコが平家の落武者然たるお上品ひとがらな野黨の事だから、例に由て多數黨の横暴を地團太踏ぢだんだんで口惜くやしがる位が關の山だらう。長い物には巻かれる強い者には負けてると、何につけてもアキラメ主義の善人揃ひでは瘦肱張つて力むものが損をする。

尤も人間は強ちアキラメ主義でなくとも何處かにノンキな性分があるもんだ。ブルドックのやうな始終しよつ中喧嘩腰ちやうの獨逸人でも大戰爭の眞最中、プラカード蒐集の機關といふやうなノンキ極まる道樂雜誌を廢めない處か新規に創めたり、全國動員の英國でもツエツペリンの爆彈が頭の上で破裂する中で芝居をしたり、舞踏まじゆを踊つたり、何時砲彈が飛んで來るか解らぬ塹壕の中でさへ新聞を發行したり、晝の展覽會を開いたりした。人間は直ぐ不安や危険に馴れるもので、悲觀する傍から樂觀し、愚痴を覆す口の下からノン

キな太平樂を列べる。朝から晩まで一日メソ／＼と泣言を列べたり、青筋出して理窟を捻くつてばかりゐるものでない。

過激派と云へば世界中から惡鬼羅刹の別名のやうに身慄ひされてゐるが、其の過激派の革命の血で彩られるベトログラードは全市が血みどりになつてゐるかと思ひの外、歌劇も上演されてゐるし文藝美術の保護の道も相當に行はれてゐるらしい。過激派だつて人間の子だから歌ひも踊りもする。一時は興奮しても際限なく手負猪のやうに暴れ狂ふものではない。況してやお目出度い特殊國の日本では階級打破だの労働問題だのと、紙の上の空騒ぎだけは馬鹿に景氣が好いが、マダ／＼國民の大部分は役人を恐がつたり資本家を難有がつたりしてゐる。總選舉がイツデモ政府黨の勝利と定つてゐるのも此消息は解る。

早い咄が、最近の經濟的大變調で中産階級以下は肉を割き骨を削るの大辛酸を嘗めてゐるが、名だけはI・W・Wの向ふを張つてゐるらしいS・M・Uはドレだけの活動をしてゐる？ 偶には官吏が結束して迫るとか同盟して怠業するとかいふ元氣な噂を聞く事もあるが、上官が猫撫聲で慰諭したり官紀を楯に威嚇したりすると、直ぐタワイなくグズ／＼に折れて了つて、力瘤を入れるものがイツデモ馬鹿を見る。一知半解的に紙の上の改造論や解放論に共感して影辨慶の階級打破を力んでも、上官や重役の前へ出ると赤い顔をしたり青い顔をしたりする。

道路問題でも電車問題でも市の當局者は無い袖は振られないと道樂者が高利貸でも踏倒すやうな氣になつてイケ酒蛙々々と沈着いてゐるが、肝腎の市民が恁うヅウ／＼しく高を括られると無能息子でも持った

氣で仕方が無いとアキラメてゐる。雨の降る日こそ泥田の中を歩くやうな惡路にブツクサ云ふが、天氣になるとケロリと忘れて砂塵ぐらゐは何とも思はない。毎日朝と夕と芋を洗ふやうに電車に揉まれても車掌に劍突を喰はせれば最う濟んだ氣になつてゐる。

大本教の灼いちこな豫言では、内閣政治の運命も徐々そく盡きてゐるさうだが、此頃の行詰りやうでは神様の看透しでなくても此位な見當が附かない事は無い。が、マダ粟を喰つて綾部へ逃出す神經家が一人も無い位に、國民は米の高いのに五色の息をしながらも大吠あぐびをしてゐる。妖怪おばけは箱根から以東、革命は敦賀から此方には決して來ないものと、腹の底では無氣味な動搖を感じてゐても、表面うへは何喰はぬ平氣な顔をして納まつてゐる。

恚ういふ世の中では力むものが損をする。寧ろ東海を踏んで逃出したいにも金は無く、然うかと云つて山へ隠れて蕨を喰ふのも餘り知恵が無さ過ぎる。矢張黴臭い書齋に肱枕してノンキな空談でもしやうかな。

(二) 御一新の舊弊退治

改造の議論は喧ましいが、斷行の勇氣ある者が一人でも有る乎。夫から比べると維新の改革者は皆眞剣だつた。議論するよりは直ぐ實行だ。其のテキパキしたヤリ口は露西亞の過激派ソツクリだつた。若い伊藤や大隈が牛耳を取つた所謂築地の梁山伯は當時の過激派の牙城であつた。

何しろ二十四五歳の、氣慨一方で經驗も閑歴も人爵も金力も無い青年が一足飛びに成上つて廟廊の實權を握つたんだから、恰も無人島でも開墾するやうなツモリで書生放論の空想を直ちに實行しやうとした。特殊の國情も固有の美俗もあつたもんぢやない。理想に背くものは草でも抜くやうにドシ／＼破壊した。大名の領地を奉還させる、城や屋敷を上地させる、何百年來の武家の特權や定法を廢して、家祿を召上げ、帶刀を禁ずる、丁髷ちやんまげを斷らせる。服制から冠婚葬祭まで封建の風俗を根こそぎ改造しやうとした。

夫どころぢやない。一千年來國民思想の殿堂となつてゐた儒佛を足蹴にして聖堂を閉鎖する、社寺の朱印地を沒收する、堂塔を破却する、佛典を焚く、本尊を賣る。今なら國寶に登録されべき貴い佛像を二束三文で賣物に出したり、薪の代りに焚いて了つたりした。興福寺の五重塔でさへがアワヤ焚かれて了う處だつた。亂暴狼籍も爰に到つて極まる無鐵砲の頂上だつたが、此位な勢ひだつたからアレだけの改革が煤掃よりも樂々と出來たのだ。

新しい建設をするには此位な無茶な破壊力が必要だ。那破烈翁ナポレオンが獅身女面像を大砲の打ち試しの的としたやうに、美術俱樂部へ出したら何萬圓と評價されさうな名器を門出の祝ひ火に投込んで了うくらゐの勇氣が無くて徹底的の改造が出来るもんか。武井男爵は印籠の蒐集で鳴つてゐるが、此道樂を初めた抑もは、維新の當時道具屋の店先きで小僧が立派な印籠の蒔繪を小刀で削り落してゐるのを見たのが動機であるさうだ。可惜精巧あたらの美術品を惜氣もなく潰して了うのは同感し兼ねるが、恁ういふ舊物破壊氣分が上下一般に漲つてゐたからこそ維新の大改革が路傍の棄石でも處分するやうに造作もなく出來たのだ。